

衣食住生活

研究・活動レポート

第 4 号

目 次

〔活動報告〕

ー衣生活研究部門ー

山縣市とのコラボレーション 2018

ー機能的なワーキングウェアの提案ー	3
「ECO+ものづくりプロジェクト」の活動報告	5
第 10 回 手づくり絵本コンクール	7
第 6 回 伝統文化裁縫コンテスト	8
第 9 回 岐阜マザーズコレクションコンテスト参加	9
第 28 回 ア・ミューズ岐阜 ファッションショー参加	11

ー食生活研究部門ー

バローお子様ランチコンテスト実施報告	15
--------------------	----

ー住生活研究部門ー

各務原市空き家リノベーション事業	19
第 10 回わたしの住まいリフォーム・デザイン案コンテスト 2018	
	23
バス停リニューアル計画	25
防災教育プロジェクト	27

ー総合生活科学研究部門ー

2018 衣食住生活研究センター講演会

「生活者、消費者としての環境に関する課題と改善について」	32
------------------------------	----

衣 生 活 研 究 部 門

〔活動報告〕

山県市とのコラボレーション2018

ー機能的なワーキングウェアの提案ー 3

生活科学研究会 藤木 節子

「ECO+ものづくりプロジェクト」の活動報告 5

齋藤 益美

第10回 手づくり絵本コンクール 7

児玉 愛子・藤木 節子

宮本 教雄・高橋 正司

齋藤 益美・三輪 聖子

第6回 伝統文化裁縫コンテスト 8

児玉 愛子・藤木 節子

三輪 聖子・齋藤 益美

第9回 岐阜マザーズコレクションコンテスト参加 9

児玉 愛子・藤木 節子

齋藤 益美

第28回 ア・ミューズ岐阜 ファッションショー参加 11

藤木 節子

◆目的

昨年度に引き続き山口市の児童館子どもげんきはうす職員の方と、今年度は日頃お世話になっている岐阜女子大学庶務課女性用務員のワーキングウェアの提案を行うこととなった。

今年度は、子どもげんきはうす職員用は、昨年度の提案・着用結果を参考により機能的なデザインを再提案して製作することとした。岐阜女子大学庶務課用は実態把握のためアンケート調査を行い、調査結果から業務内容に合わせたエプロンを製作した。継続テーマのもと対象を拡大し、研究会メンバー（リーダー）の縫製技術やデザイン力のレベルアップとともに地域連携・コミュニケーション能力の育成を図ることを目的とする。

◆研究方法は、以下の通りである。

①デザイン提案、聞き取り・アンケート調査

子どもげんきはうす職員の方に研究会で考案したデザイン画を見てもらい職員の方の要望をまとめポイントなど聞き取り調査を行う。庶務課女性の方には、実態把握のためアンケート調査を行う。

②作品製作 ①の調査をもとに子どもげんきはうす 5 着、庶務課用 3 着ずつ製作する。

③評価 製作したワーキングエプロン 8 点を中間発表で展示し、一般来場者にアンケート調査にご協力していただき感想及び評価をしてもらう。庶務課用は、実際に展示会場で感想を聞く。また、子どもげんきはうすは、実際製作したワーキングエプロンを寄贈し感想及び評価をもらう。

◆活動結果・考察

①子どもげんきはうす

・メンバー 8 名全員が一人一着エプロンのデザインを考え、子どもげんきはうすに提出

・6 月 7 日にデザイン画を引き取りに行き職員からどのデザインが良いかの意見をいただきも

う一度デザインを見直してから 5 点に絞り製作した。

「大きくなるりんごの木」:エプロンシアターではなく、ワーキングウェアなら雨とリンゴは取り外し不要。

「みんなでパトロール」:子どもたちの憧れのパトカーがあってアイデアが良い。

「動物の汽車ポッポ」:取り外せる動物は 1 つで充分等の意見が出た。



写真1 デザイン案

2着をエプロンシアター用に残り3着はワーキングエプロンとして快適に着てもらえるようなエプロンを製作した。

11月の中間発表(さぎ草祭)では、色合いがよい、機能性がよい、デザイン性がよいとの好評価と共に、アップリケが大きすぎ、洗濯が困難なのでは等の指摘もあった。

職員の方からは、子どもの目線や使いやすさを考慮しデザインを考え製作したため、ほとんどのワーキングエプロンのデザイン性と機能性を高評価していただいた。5枚各々の良さがあり「着るのが楽しみ」だと話された。飾りボタンについては、子どもの安全面で不安な点があるという意見があった。また、「後ろ開きより前開きの方が着用しやすい」「前後両面が使えるのも良いので、後ろ衿ぐりも同様にするといい」という貴重なアイデア・意見も頂いた。

②庶務課女性用

庶務課のエプロンはアンケート結果から現状と様々な要望・条件があることが分かったので、それぞれに対応できるように3タイプのワーキングエプロンを試作し、中間発表展示会場にて意見交換をして貰った。

さぎ草祭で試着した3着のデザインの中から選び、改善点を踏まえ製作し、実際に着て貰い話を聞かせて頂いた。事前に改善する部分を直したため、喜んでいただいた。しかし、作業している時の着用姿を気にされており、使用する立場にたって製作をすることの難しさを感じた。



写真4 中間発表時の意見交換



写真2 子どもげんきはうす作品



写真3 中間発表試作3案



写真5 採用したウェア着装

ワーキングウェアとしての安全面や動作に伴う布地の動き、洗濯し易さ等デザイン優先でなく考慮すべき事項はあり、更に研究推進の必要性があり、継続したいと考える。

「ECO+ものづくりプロジェクト」の活動報告

齋藤 益美

◆活動の目的

生活科学専攻では、中学・高等学校家庭科教員を目指す学生の入学が多く、毎年多くの卒業生が、採用試験を突破して教職に就いている状況にある。しかし、入学時は自分の考えや意思を人に伝えることを苦手とする学生も少なくない。そこで、ECO+ものづくりプロジェクトでは、学生同士のグループ活動、また地域の方々と接するイベントを通して、コミュニケーションをとるための力だけでなく、イベントを企画、運営し仲間と協力し成し遂げる経験をすることで、一人ひとりが社会人として、教員としての資質を向上させることを目的として活動している。

◆活動方法

2～4年生までの運営委員(3名)が年間の目標、計画をたて、それに基づき、1～4年生の縦割りで構成されたグループのリーダー(3年生)が中心になり活動している。運営委員会、リーダー会を開催し、活動の計画と周知、グループ作品の検討、グループ活動の問題点、イベント開催等の話し合いを行い、各グループがそれぞれのテーマと目標を持って活動できることをめざしている。

4月には3, 4年生による新入生の技術指導からスタートするため、1 年生は早い段階から先輩たちと関わりを持つことになる。その後、各グループの製作活動を行っている。

また、商品販売ができるクラフト市への出店、ものづくり体験のワークショップ、親子でのものづくり体験なども行い、幅広い年齢の方と関わり、環境に配慮した生活とものづくりの楽しさを伝えている。

◆活動結果・考察

ECO+ものづくりプロジェクトの立ち上げから5年目となる平成30年度の活動について次に示す。

月	活動状況	リーダー会等
4 月	新入生歓迎会 リーダー決定、グループ決定 グループ活動開始	運営委員会
5 月	小さなクラフト展の商品製作 1年生技術指導 (Eco フラワー、裏付きトートバッグ)	
6 月	小さなクラフト展の商品製作、出店準備 小さなクラフト展 出店 (6/2)	運営委員会
7 月	全体製作 (新聞紙エコバッグ) さぎ草祭の商品について検討、商品試作 懇親会 カレーパーティ (7/24)	運営委員会 (展示・ワークショップの企画) 懇親会準備
8~9 月	さぎ草祭の商品製作 ワークショップ『ものづくりの楽しさを体験しましょう!』 岐阜市立図書館分館 講座 (8/25、9/2) 展示『布を使って季節を楽しみましょう』 岐阜市立図書館分館 展示 (8/21~9/3)	展示・ワークショップの準備と製作 展示搬入・撤去作業
10 月 11~12 月	山県市栗祭り 出店予定 (9/30) ... 天候不良のため開催中止 さぎ草祭の商品製作、出店準備、4 年生商品製作 さぎ草祭 模擬店出店 (11/10、11) 乳弁天手作り市 子どもの遊びコーナー (11/10) 美濃八幡神社手作り市 出店 (11/24)	リーダー会 運営委員会 模擬店準備・会計
12~3 月	全体製作 (技術力の確認) 『親子の手作り企画』 準備 (トートバッグ・ネームタグ作り) 『親子の手作り企画』 3 年生 (2/17) (3/28) 2 回開催	運営・リーダー反省会 会計・事業報告作成

6月に出店した「ちいさなクラフト展」(岐阜市八幡町 八幡神社)は売り上げにはつながらないが、環境が良く、他の出店者とのコミュニケーションが取りやすい。学生がアイデアを得られたり、繋がりをも築ける機会を得やすい場所である。出店店舗の質が高いので、担当学生にとって学びにつながると考えている。今回は米袋で作ったポーチ、端切れで作った仕分けポーチ、端切れで作ったポンポンヘアゴム等の商品の販売を行った。ワークショップは結びのストラップ、デコクリップ、くるみボタンのヘアゴムの3種類を行い、小さな子どもたちの参加にとどまった。



8～9月に開催した岐阜市立図書館分館ファッションライブラリーでの展示とワークショップでは、展示「布を使って季節を楽しみましょう」をテーマに廃棄布を利用し、生活に季節の彩を取り入れた作品展示を行った。

ワークショップは「ものづくりの楽しさを体験しましょう」をテーマにうさぎリボン、ネームタグ、ウッドクリップ、ヨーヨーキルトバッジの体験を行い、1回目(8月25日)は延べ人数50人、2回目(9月2日)は延べ人数49人の参加があった。簡単なものではあるが、年齢も裁縫の経験も様々な人にわかりやすく伝えていく経験は貴重なものとなった。ワークショップ参加者のアンケートから、ECO+ものづくりプロジェクトの活動を知っている人は24%程度であった。ワークショップが楽しかったかという質問に対し、楽しかったと回答した人が100%であった。学生の対応、笑顔、言葉遣い、伝え方などが評価されていると考えられる。このワークショップによってものづくりの楽しさを伝えることができたと言える。



10、11月は美濃八幡神社の手づくり市、さぎ草祭の模擬店、乳弁天の子どもの遊びコーナーと続き、商品作り、企画、運営が大変な時期である。

さぎ草祭の模擬店はほとんどの学生が販売とワークショップの対応を経験する良い機会となる。売り上げも多く、各グループが販売数を意識しながら販売する様子がうかがえる。今回の反省では、ワークショップの参加者を増やす工夫が必要であることが挙げられた。また、なかなか声をかけられない、商品の説明がうまくできないといった学生も見受けられた。グループリーダーや運営委員から商品、ワークショップの丁寧な説明や声掛けが必要である。

2、3月にはワークショップ「親子の手づくり企画」が行われ、企画、広報、運営等すべて3年生が行っている。今年度はネームタグ付きトートバッグの製作で1回目は4組11名、2回目は3組7名の参加者があった。はじめて針を持つ、ミシンを使うといった子どもたちがほとんどであるが、子どもの目線にたち丁寧に楽しく伝えている姿が見られた。これをきっかけにものづくりに興味を持ったと、ワークショップ開催を待ち望んでいる親子もあり、活動の目的が果たせていると考える。

第 10 回 手づくり絵本コンクール

児玉愛子、藤木節子、宮本教雄、高橋正司、齋藤益美、三輪聖子

◆目的

平成 22 年より赤ちゃんが初めて触れる絵本「ブックスタート」をテーマとして「手づくり絵本コンクール」を実施している。今年で第 10 回を迎えることとなった。

絵本が子どもの発達に良い影響を与えることは、様々なところで言われており、成果も報告されている。また、製作者自身も子ども理解と優れた絵本への関心を深めることができ、その他にも 1 つの物を仕上げる達成感、継続する力、創造力と想像力、思いやりの気持ち、手先の使用による脳への刺激など、絵本を製作することの有用性は多く認められている。教育の一環として絵本製作に取り組み、その成果を発表する場として、絵本コンクールを実施する。

◆活動方法

チラシの配布、大学ホームページを通して、中学生以上を対象に作品を募集している。絵本は、一般絵本、布絵本、立体絵本、仕掛け絵本など乳幼児を対象にした作品として、手づくりとしている。

4 人の審査員によって厳選なる審査を実施し、大賞 1 点、優秀賞 2 点、岐阜女子大学賞 2 点、入賞 2 点、敢闘賞 1 点を選出した。11 月のさぎ草祭期間中に表彰式を行なう。なお、選出された作品は、2 月まで岐阜女子大学図書館にて展示を予定している。

◆活動結果・考察

第 10 回の応募数は 397 作品と昨年度よりも多くなっている。今回は目立った優秀作品は少なかった。また、学校単位で応募されるものの中には丁寧さに欠けるものも見受けられた。学校での絵本製作に対する指導があるとよいと考える。一般の方の応募も増加しているが、病院内の通所支援の方からの応募もあり、応募者の幅が広がってきた。今回の受賞作品は次に示す。



大賞



優秀賞



優秀賞



岐阜女子大学賞



岐阜女子大学賞



入賞



入賞



敢闘賞

第6回 伝統文化裁縫コンテスト

児玉愛子、藤木節子、三輪聖子、齋藤益美

◆目的

平成 25 年度より中学・高校生を対象に、伝統文化裁縫コンテストを実施している。今年で 6 回目を迎えることになる。中学・高校生が日本の伝統文化に触れ、布を用いて作品を製作することを通して、製作に関する基礎的・基本的な知識および技能を身に付けるとともに、物作りの楽しさを実感し、生活を豊かにするために活用する能力と創造力を育てることをねらいとしてコンテストを実施する。

◆活動方法

テーマを「オリンピック」とし、2020 年に東京で開催されるスポーツの祭典「オリンピック」をテーマに自由でオリジナルな発想とし、チラシの配布、大学ホームページで、県内を中心に全国の中学・高校生を対象に作品を募集している。『日本の良さを発見～手づくり好きな人 日本の伝統文化を大切にしたい人 日本の文様、伝統色、染色、工芸などに興味のある人 あなたのアイデアとセンス、技術をこの機会に作品にして応募してみよう！』と呼びかけた。

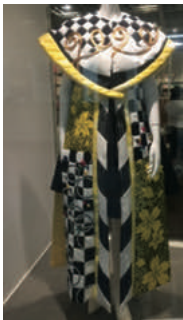
作品は衣装を製作する衣服作品部門と、高度な技術がなくてもできるアイデア作品部門とに分かれており、家政系以外の高校生や中学生が興味を持ち応募することも期待している。

◆活動結果・考察

衣服作品部門の 1 次審査応募作品数は 62 点、アイデア作品部門は 15 点であった。

○衣服作品部門の優秀作品

最優秀賞



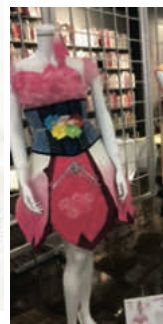
加藤 遥香
岐阜県立岐阜城北高等学校

優秀賞



大下 彩楓
岐阜県立大垣桜高等学校

大学賞



渡辺 美月
岐阜県立東濃実業高等学校



○アイデア作品部門の優秀作品

最優秀賞

野村 翼
岩瀬日本大学高等学校



第9回 岐阜マザーズコレクションコンテスト参加

児玉愛子、藤木節子、齋藤益美

◆目的

平成 29 年度は、2017NDK ヤングデザインコンテストXI テーマ:煌き(きらめき)に出品し、製作した2作品が「岐阜新聞社賞」「岐阜市教育委員会賞」を受賞。学長賞の対象となった。

平成 30 年度は、NDKのコンテストが開催されなかったため、岐阜ファッション産業連合会が主催する第9回岐阜マザーズコレクションコンテストにファッション分野に興味・関心を持ち、コンテストへの応募を希望する学生対象に挑戦をさせることとした。

◆活動方法

岐阜マザーズコレクションコンテストは産学コラボレーションプロジェクト(岐阜ファッション産業ブランド確立支援事業)は、岐阜アパレルメーカーとミラノデザイナーを目指す学生とのコンテスト形式の産学協働コラボレーション支援企画である。“お母さんにきてもらいたい「素敵なお服」をコンセプトに”お洒落で着易く斬新なデザインの未発表オリジナルデザインを公募。

募集テーマは「ViVid」(ビビッド) サブテーマは Mamma Mia! (マンマミーア)
イタリア語で「私のお母さん」マンマミーアの躍動感溢れる表現と、イタリア・フィレンツェの街がテーマエッセンス。6月18日募集締切。1年1名、2年2名。4年1名の4名がデザイン画応募し、3名が一次審査で選ばれ作品を製作した。

◆活動結果・考察

応募作品は以下の通りである。

1年 近藤佳七 テーマ「Viaggio fiore (ヴィアジョ フィオレ)」

3年 池田鈴音 テーマ「カトレア」

4年 西尾 望 テーマ「モダン」



写真1 応募デザイン画の展示



写真2 会場看板

西尾望の作品が、一般社団法人 岐阜ファッション産業連合会 理事長賞受賞。



写真3 西尾受賞作品

製作意図：全体をモノトーンで統一し、ボタンやアクセサリーでアクセントを入れることで、若々しく芯の通った大人の女性を演出した。ストライプを左右でアシンメトリーにして、チェック模様を入れることで動きを表現した。



写真4 近藤作品 池田作品 西尾作品

－考察－

岐阜マザーズコレクションコンテストとほぼ同時期に「全国学生デザインコンテスト(岐阜シャツプロジェクト×TonyaEXPO実行委員会主催) 募集テーマ:個性が輝く日本男子! デザイン画募集」があり、西尾が応募したが残念ながら一次審査通過できなかった。課題としてはメンズ作品への初挑戦であったこと、応募期間が短期であった点が上げられる。このコンテストは、未来のデザイナーを繊維のまち岐阜から発掘し商品化までをサポートする企画で、全国のファッションを学ぶ学生を対象としており、岐阜のアパレルの活性化が期待され支援するというコンセプトであった。レベルの高いコンテストであるが、機会があれば再チャレンジさせたい。

昨年度に続き学生の外部コンテストへの挑戦により、デザイン・企画力及び表現力、製作技能の向上とともに、外部における評価が実感でき学生達の課題把握や自信となり前向きな姿勢・やる気へと繋がったと感ずる。

今後でもできる限り少しでも多くの学生に、可能性への挑戦をさせたいと考える。

第 28 回 ア・ミューズ岐阜 ファッションショー参加

藤木節子

◆目的

岐阜アパレルの最新春夏ファッションを提案するイベント「第 28 回ア・ミューズ岐阜」(岐阜ファッション産業連合会主催)に興味・関心を持ち、学修成果をより向上させショー参加を希望する学生対象に挑戦をさせることとした。今回は 3 年ぶりに県内の大学・短大・専門学校でデザインを学ぶ学生によるプレビューショーが復活し、生活科学専攻の学生にとっては初めての参加となった。

◆活動方法

「第 28 回ア・ミューズ岐阜」が平成 31 年 3 月 5 日～6 日の二日間じゅうろくプラザ並びに問屋町全域で開催された。テーマは「Brilliant (輝きをもう一度)」岐阜駅前アパレル問屋街の輝きが失われつつある中で、産地岐阜としてもう一度輝きを取り戻すために、岐阜産地の地域とともに、ア・ミューズ岐阜を全国に発信するという平成最後であり新しい年へ繋ぐという貴重なショー参加の話が岐阜ファッション産業連合会事務局から 12 月にあり、学生と一緒に検討し挑戦することとした。

ショーへの参加希望者を募り、1 年から 4 年の 8 名の申し出が有り参加することになった。

◆活動結果・考察

1. 3 パート構成とし、テーマ「モダン」に 4 年西尾望、2 年沼田純里、1 年近藤佳七の 3 名はモノトーンでまとめ、テーマ「春風(はるかぜ)」は、2 年丹野寛代、大森裕奈、池田鈴音の 3 名は白をメインに黄色を加え優雅なシルエットに、「胡蝶(こちょう)」は 2 年鈴木歩香、梅田咲也佳はチャイナカラーでシックにまとめた。



写真 1. 2

ファッションショーの様子



大半の学生が、自分の着たい衣装を初めてデザインし挑戦した。布地選び・型紙作成、製作を放課後や期末テスト終了後の時間を使っての取り組みであったが、ステージでの姿をイメージしながら努力し完成させた。また、ステージを歩くために、音楽・ナレーション・スクリーンのスライド準備や各パートごとにモデリング練習を行い、フィナーレ対応では 8 人が揃ってまとまるよう考え進めた。

ショーステージは、音響・照明はプロが担当、ランウエイは幅 3.6m 長さ 11.4m、高さは 85 cm の本格的なもので、学生は緊張感の中堂々とモデリングを行った。ショー終了後は、フレッシュな感性の作品が好評であった。



写真 3 じゅうろくプラザ ア・ミュージアム岐阜看板前に集合した 8 名

(スチューデント プレビューショー終了後)

2. 参加校は、出演順に岐阜女子大学、飯原服飾専門学校、コロンビアファッションカレッジ、平野学園服飾専門学校、岐阜市立女子短期大学の 5 校であった。

－考察－

卒業製作発表を行っていない本専攻ではショーへの参加は個人(有志)参加となる。この場合授業以外の時間確保が容易でないが、やる気が製作意欲へと向かって形となることが実感できた。時間は無いのでなく時間を生み出し計画的にコツコツ取り組む事の重要性を痛感したと考える。授業課題とは異なって本人の能力に合わせた企画作品を完成させやり抜く力やチームとしての構成力・団結力を付ける最良の機会でもある。今後もこのような機会は積極的に参加継続し、学生の成長を発表する場であると同時に本専攻の取り組みをアピールする機会としても考えたい。

布地の一部は県繊維協会会員のカワボウ繊維(株)から提供いただき、学生支援に感謝するとともに、体験を家庭科教員やファッションに関わる職業へと繋がり更に活かして欲しい。

食 生 活 研 究 部 門

〔活動報告〕

バローお子様ランチコンテスト実施報告・・・・・・・・・・・・ 15

水野 幸子・片桐 幸子

和田 玲子・大場 君枝

村山 香里・長浜 小春

バローお子様ランチコンテスト実施報告

水野 幸子 片桐 幸子 和田 玲子 大場 君枝 村山 香里 長浜 小春

◆目的

平成 21 年より始まり、今年で第 12 回目を迎えた。小学生が自分の家族の為に考えて調理することを目的として、家族がひとつになり、盛り上がりを見せている。また、本学の学生がサポートとして実際に小学生の調理現場に入ること、現在の小学生の食に対する意識や調理技術を知り、今後管理栄養士として社会で働く前に 1 つの栄養教育の場を体験することもできる。

◆活動方法

テーマに【僕の・私の自慢のランチ・お弁当】と掲げ、小学生 2 人 1 チームとし、ランチ・お弁当のアイデアを募集された。審査員による書類審査を行い、決勝大会進出 20 チーム(40 人)を選考し、選ばれたチームは本学での決勝大会において実際に制限時間 90 分以内に考えたランチの調理を行った。コンテスト規定により保護者は一切調理室に入室できない為、本学の学生 10 名が 2 チームに 1 人付き、調理上のサポートを行った。できたランチの中から審査員による審査にて各賞を決定し表彰を行った。

当日はゲストかつ審査員でもある森野熊八様による毎年恒例のクッキングショーも実施され、今年はナスのカバ焼き、豚挽肉のデッカイカツ、水ヨーグルかんの 3 品を披露された。

今年の日程と、コンテスト運営に関わる協賛は以下の通りである。

募集締切:令和元年 7 月 15 日(月・祝)

書類審査:令和元年 7 月 25 日(木)

決勝大会:令和元年 8 月 25 日(日)

【主 催】 りんごちゃん・岐阜新聞

【特別協賛】株式会社 バロー

【協 賛】 イチビキ , 伊藤園 , ミツカン
サントリーフーズ , 理研ビタミン

【協 力】 岐阜女子大学



写真 1 調理の様子

◆活動結果・考察

コンテストへ 121 チームの応募があり、書類審査を通過した 20 組が実際に自分の考えたレシピを基に調理を行った。ランチには、小学生らしく可愛い料理もあれば、テーマパークや乗り物に擬えた料理など、こだわが多くみられた。その背景に、親が子へ自分の教えられてきた料理を教えつ

つ、子どもの考えを尊重しながら家族一団となってコンテストに向けて一緒に取り組んだ姿があったと感ずることができると。

審査員の評価では、子どもらしさはもちろんであるが、それ以上に味を評価し、味の重要性を強く話された。夏休みの恒例行事として数回参加し、予選通過をしているチームもあり、料理に対してより興味を持つことができたのではないかと考える。学生はサポートする中で小学生の調理技術の実際に触れ、豊かな発想や行動に驚かされた。将来社会に出て、栄養教育を行うにあたって貴重な経験ができたのではないかと。

最後に本活動は本学学生のか端 秋帆さん、草山 千優さん、我如古 花観さん、石田 歩さん、隈部 貴子さん、豊田 歩実さん、棚橋 瑞季さん、菅沼 美風さん、古田島 百香さん、増田 桃香さんの協力にて実施できたことを申し添える。

住 生 活 研 究 部 門

〔活動報告〕

各務原市空き家リノベーション事業・・・・・・・・・・・・・・19

黒見 敏丈・大崎 友記子
森田 実沙

第10回わたしの住まいリフォーム・デザイン案コンテスト2018・・・・・・23

大崎 友記子・富士 霸王
黒見 敏丈・高橋 信行
森田 実沙

バス停リニューアル計画・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・25

森田 実沙・大崎 友記子
黒見 敏丈・高橋 信行

防災教育プロジェクト・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・27

大崎 友記子

各務原市空き家リノベーション事業

黒見 敏丈・大崎 友記子・森田 実沙

◆目的

本事業は、深刻化する空き家の増加と人口減少に対応するため、若い世代の移住・定住を促進するために、産官学金の四者の連携協定を結び空き家のリノベーションを進めようとするものである。そのため、本学には建築・インテリアを学ぶ女子大生の若い自由な発想に基づく空き家のリノベーションデザインの提案を求められたものであり、昨年度に引き続き3年目の事業である。

◆活動方法

本事業は、インテリアデザイン論・実習Ⅰ・Ⅱ(3年生の授業科目)の1つの課題として、受講生6名が市より提示されたモデル空き家3軒のリノベーションデザインに取り組んだものである。

◆活動概要・考察

(1)対象空き家物件の現地調査:7月26日(木)午後

市から6月末に提供を受けたモデル空き家物件(3件)の基本図面と写真を踏まえ、リノベーションデザインのプラン作成のための現地調査を行った。教員3名と学生6名が2台の車に分乗して3軒を巡り、周辺の環境や建物の現状を把握するとともに、細かな部分の採寸等を行った。



写真1 現地調査の様子1



写真2 現地調査の様子2

(2)リノベーションのコンセプトの明確化とデザインの具体化:10月19日(水)～11月13日(火)

夏休み中に各自が暖めてきたリノベーションのコンセプト等を明確化し、そのコンセプトに基づいてリノベーションデザインの具体化を図り、3D-CADソフトや手描きのスケッチパースによりプレゼンテーションシートにまとめていった。

(3)成果の報告会:11月14日(水) 10:00～11:00 於 大学10号館10302教室

市の担当課、各務原市空き家リノベーション事業推進会議会員の民間設計事務所、空き家の所有者の方々を本学にお招きし、学生が6つのデザイン案のプレゼンテーションを行った。学生の思いのこもったプレゼンテーションに市の方々も感激され、その内容も大変好評であった。市では、これら

の提案を受けて、空き家の利活用の促進に努める予定となっている。

なお、報告会には、新聞社2社の取材も入り、広く報道された。



写真3 報告会の様子1



写真4 報告会の様子2

今回の事業は、学生にとっては、現存する建物を対象としてリノベーションデザインに取り組むことができ、またそのデザインに基づいて実際にリノベーションが行われる可能性を持っているという点で、通常の授業課題とは異なり、緊張感と期待感を持ちながら真剣にデザインに取り組めたと考えている。昨年度に引き続きこのような機会を提供していただいた各務原市には深く感謝申し上げる次第である。

(4) 事業の新展開

今年度事業では、昨年度までと同様の上記の取り組みに加え、3軒の対象空き家物件の一つについては実際にデザイン提案に基づくリノベーション工事まで取り組むことができた。

対象となった空き家は、各務原市空き家リノベーション事業推進会議会員の工務店がサブリース契約を結んだ物件で、この工務店と同会議会員の設計事務所、ならびに各務原市との産官学連携事業として実施した。なお、リノベーション工事は特別プロジェクト実習と連携し、3年生だけでなく、1・2年生も参画した。以下に事業の大まかな流れを示すとともに次頁以降に写真等のデータを提示する。

- 7月 26 日(木) 対象空き家物件の現地調査
- 8月 7 日(火) 耐震診断ソフト等を活用した耐震補強講習
- 9月 14 日(金) 3者による打ち合わせ(設計条件の確定)
- 10月 1 日(月) 3者による打ち合わせ(デザイン提案の提示)
- 10月中旬 着工
- 12月中旬 完成
- 12月 26 日(水) 完成披露会

昨年度までの事業と異なり、実際にリノベーション工事が実施され、その工事にも参画できたことは学生にとって大変大きな刺激となった。また、授業ではなかなか行えない耐震診断ソフトを操作したり、その結果に基づいて耐震補強工事をどのように行うのかを知ることができたことは学生たちが社会に出てからも役立つ経験となった。

空家 × リノベ × 住居学

築55年の木造平屋住宅の空き家リノベーション提案



深刻化する空き家問題に対処するために、空き家を改修（リノベーション）して活用を図る事業が各地で進められています。この度、産官学（工務店・設計事務所×各務原市×岐阜女子大学）連携で若い世代を受け入れる、空き家リノベーションを行っています。私たちはリノベーションデザインの提案、工事、借り手募集のお手伝いをしました。

実際に提案したイメージパース

Style1



Style2



リノベーション前写真



築55年の木造平屋住宅の空き家リノベーション提案

Gifu Women's University

[illegible]

8月上旬 耐震補強講習 >>> 9月 提案書作成 >>>>



10月中旬 着工 解体・撤去作業



10月下旬 耐震補強工事 >>>>>>>>>>>>>>>>

[illegible]

11月上旬 床張り工事

[illegible]

11月下旬 クリーニング ▶▶▶▶▶▶▶▶▶▶▶▶▶▶▶▶

[illegible]

12月中旬 完成！



第10回わたしの住まいリフォーム・デザイン案コンテスト2018

大崎友記子 富士霸王 黒見敏丈 高橋信行 森田実沙

◆目的

建築及びインテリア関係への進路を選択する動機づけとなることを期待すると共に、大学と高等学校等が連携し多様な学習機会を提供する一つの活動の場として『わたしの住まいリフォーム・デザイン案コンテスト』を開催しています。このコンテストは10回目となり、次の活動方法に示すとおり技術・デザイン部門とアイディア・デザイン部門の2部門で実施しています。

◆活動方法

住まいを対象に、「技術・デザイン部門」と「アイディア・デザイン部門」の2部門でリフォームの提案を募集し、それぞれ優秀賞、奨励賞について賞状と副賞を11月11日(日)に交付しました。入賞作品は岐阜女子大学家政学部生活科学科住居学専攻 HP に掲載すると共に平成31年2月16・17日、岐阜柳ヶ瀬「てつめいギャラリー」にて展示しました。

- (1) 応募期間 平成30年8月20日(月)～平成30年9月9日(日)
- (2) 募集内容 住まい全体、あるいは住まいの一部を対象として選び、現況の様子あるいはリフォーム前の写真や図と、リフォーム後の構想を平面図(寸法記入は不要)・立面図・透視図などに表現
- (3) 応募資格 高校生・短期大学生
- (4) 作品応募規定

A:技術・デザイン部門

提題された住まい(本学 HP 掲載)を対象にして、現実的な問題(例えば、環境とエネルギー・高齢者や障がい者への配慮・コミュニティの活性化など)への提案を評価

B:アイディア・デザイン部門

若々しく楽しい発想や斬新な図面表現、身近な実践例などを評価

(5)審査員

加藤幸治 日本建築学会岐阜支所長(一級建築士事務所 加藤計画工房 登録建築家)

入山 要 公益社団法人 岐阜県建築士会 岐阜支部支部長

(株式会社山田組 一級建築士 総務部長)

大崎友記子 岐阜女子大学家政学部生活科学科住居学専攻 教授・専攻主任・一級建築士

富士霸王 同上 教授・岐阜女子大学学生部長・家政学部長

一級建築士・岐阜県建築審査会会長・岐阜県建築士審査会会長

黒見敏丈 同上 教授・大学院生活科学研究科長・一級建築士

高橋信行 同上 准教授・一級建築士

森田実沙 同上 助教

◆活動概要・考察

応募いただきましたのは岐阜県内にとどまらず宮城県、静岡県など多数の高等学校から参加をいただきました。応募の内訳は技術・デザイン部門が24点、アイデア・デザイン部門が105点、合計129点の応募をいただきました。応募いただきました高校生の皆様、そしてご指導いただきました関係の皆様へ心からお礼申し上げます。

また昨年、岐阜県建築士会岐阜支所様に本コンテストの趣旨にご賛同いただき、岐阜県建築士会賞を設け、今年は高校2年生の生徒さんが受賞されました。残念ながら特選の該当者はありませんでしたが、技術・デザイン部門では建築士会賞1点と優秀賞3点及び奨励賞2点を、アイデア・デザイン部門では優秀賞3点及び奨励賞5点、そして全体で学校賞が1校という入賞結果となりました。受賞されました皆様には、その努力に対し敬意を表し賞状と副賞を贈呈いたしました。審査員の皆様をはじめ、関係の皆様にも厚くお礼申し上げます。



写真1 表彰式風景



写真2 表彰式記念写真

バス停リニューアル計画

森田 実沙・大崎 友記子・黒見 敏丈・高橋 信行

◆目的

老朽化したバス停のリニューアルを大学側から依頼された。今年度本学は、創立 50 周年を迎え、地方の小さな女子大学ではあるが、各学部専攻で特色のある教育を展開しており、学生は全国から集まっている。沖縄女子短期大学と姉妹校提携を結び10年目であり、沖縄出身の学生も年々増えていることから、今回のバス停リニューアルに際し、沖縄の要素を取り入れた計画とすることとした。

◆活動方法

特別プロジェクト実習の一環として行った。同時期に空き家リノベーションプロジェクトがあるため、1、2年生が中心となり工事を進めた。当初は、バス停の建て替えを計画していたが、法律上困難なうえ、さざ草祭までに工事を終える必要があったため、今までのバス停の鉄骨の躯体をそのまま利用してリフォームすることとした。

◆活動概要・考察

(1) デザイン

沖縄の要素を取り入れたバス停にするため、下記の 6 つのポイントを取り入れた。

- ① 沖縄の建築資材である花ブロックを採用
- ② 沖縄の赤瓦を意識した赤いガルバリウム鋼板の屋根
(躯体を再利用したため瓦を葺くことは困難であった)
- ③ 漆喰の外壁を意識した白い壁
- ④ 学生手作りシーサーの設置
- ⑤ 沖縄県マークをモチーフにした模様
- ⑥ 沖縄のシンボルの模様を取り入れた帯飾り

(2) 工事

工事期間は10月上旬～11月上旬の約1ヶ月間である。工事に際しては、工務店等の職人さんと教員の指導のもと、安全に実際の建設工事を体験することに主眼をおいて進めた。学生が行う工事内容は花ブロック積み、壁のケイカル板貼り、塗装、シーサーの製作、帯飾りの製作、カットイングシートによる柄の製作である。その他の足場の必要な工事や電気等、資格の必要な工事などは、業者へ委託した。



写真1 花ブロックの設置



写真2 花ブロックの塗装



写真3 帯飾りの製作

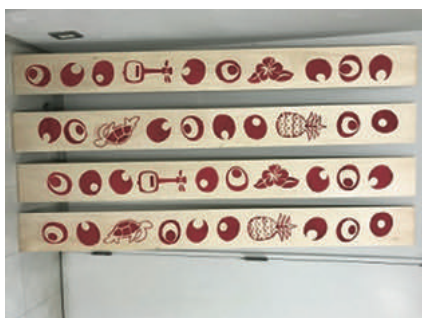


写真4 完成した帯飾り



写真5 リニューアル後のバス停

(3) 考察

学生にとっては、日ごろから利用するバス停を自分たちの手でリニューアルするという体験は、非常に楽しく、貴重な体験であったと考える。特に1年生は、初めて使用する道具も多く、職人さんや2年生から指導を受けながら、使い方を学び、工事現場というものを体験できたことは、今後の特別プロジェクト実習への大きな意欲へとつながったと思う。

防災教育プロジェクト

大崎友記子

◆目的

昨今、激甚災害に指定される自然災害が各地で相次いでおり、災害時に女性や子ども、高齢者、障害者など多様な人々に配慮するために、地域防災の取組に男女共同参画の視点を浸透させていくことが必要とされている。本学の体育館も地域の避難所に指定されており、2017 年には避難生活をサポートするための災害時浴室棟を、施工実習の一環として建設した。災害時浴室棟も活用しながら、防災の観点を取り入れた教育カリキュラムの開発を見据え、まず防災の基本知識を習得し、避難所で何が起きているのかを疑似体験する目的として、今回は災害時シミュレーションゲーム(避難所 HUG)を体験した。

◆活動方法

災害時シミュレーションゲーム(避難所 HUG)は、2007 年に避難所運営を皆で考えるためのひとつのアプローチとして静岡県が開発した防災ゲームである。今回この防災ゲームを体験するにあたり、防災の基本知識として、岐阜大学流域圏科学研究センター 小山真紀准教授のオンライン講座「gacco」の「事例に学ぶ災害対策講座」を3年生全員が視聴。その後小山准教授のご指導の下、3年生の11名が参加して、避難所 HUG の実体験を行った。

◆活動概要・考察

(1)準備(基礎知識を学ぶ)

3年生の A グループは6月4日(月)～7月23日(月)、B グループは9月25日(火)～11月6日(火)の間に、「事例に学ぶ災害対策講座」を視聴し、災害の種類、避難所生活、災害時対策などについての基礎知識を学んだ。実際に自宅がある場所のハザードマップを調べ、災害時の避難場所や避



写真 1 オンライン講座「gacco」視聴の様子

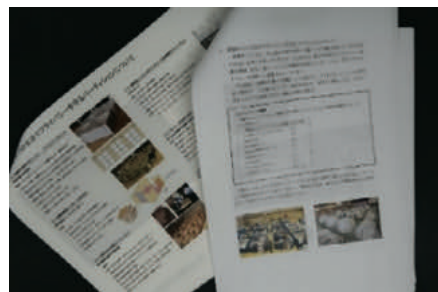


写真 2 避難所生活についてのレポート

難所を確認し、緊急時に備えるべき家庭用食料の備蓄品などについても調べた。また、住居学を学ぶ学生として避難所生活での居住環境についての問題点、課題等についてのレポートをまとめた。多くの学生は、家族間のプライバシーを守るパーティションについて興味を持ち、現在使用されている段ボール製のものや、布を組み合わせたもの、テント形式のものなど、様々な種類のものが開発され、利用されていることに驚いたようだ。

(2)災害時シミュレーションゲーム(避難所 HUG)の体験講座 11 月 26 日(月)9:20~12:30

はじめに小山准教授から、2018年7月の岡山県真備町での豪雨災害についての報告を伺い、改めて避難所生活で生じる様々な問題や避難所運営の難しさを認識することができた。その後 A、B の2つのグループに分かれ、小山准教授の指導の下避難所 HUG を体験した。このゲームでは避難者の情報(年齢・性別・家族構成・持病など)が書かれたカードを、避難所の体育館や教室に見立てた平面図にどれだけ適切に配置できるかを模擬体験することができた。また炊き出し場や仮設トイレの配置などの生活空間の確保や、避難所で起こる様々な出来事に短時間で対応しなければならず、グループ内で細かく相談する間もなく即断・即決することの難しさも体験した。



写真3 小山准教授による真備町豪雨災害報告の様子



写真4 避難所 HUG を体験中の様子

(3)今後について

グループごとでゲーム終了後に振り返りを行った。その中で、学生が想像する以上に、様々な立場や事情を抱えた人が避難することが想定されており、短時間に多くの避難者を避難所に振り分けるには、何を優先したらよいのかを迷うことが沢山あった、との意見が出た。また生活空間の配置も、配慮すべき避難者や避難者間での不公平さの問題、一度配置したら簡単に移動することが難しいなど、実際に小山准教授が避難所で遭遇した事例も参考にしながら、それぞれの意見を出し合った。しかし、何が正解かの判断が難しく、小山准教授から、時間を経て今回の結果を再度検討すること

や、メンバーを変えてゲームを行っていくことで、より多角的な視点や、様々な立場の人を理解できるようになるとのアドバイスをいただき、今後も継続的に実施したいと考えている。



写真5 避難所 HUG の体験シート



写真6 避難所 HUG 体験後、壁面には掲示案内
意見交換の様子

(4) 考察

今回の試みは、学生にとっては、災害を身近に考える機会となり、日頃の準備や備えが非常に大切であることを改めて気づく貴重な経験であった。災害時シミュレーションゲーム(避難所 HUG)を体験することで、避難所の居住環境を考える機会ともなった。次年度は、大学体育館を避難所として、災害時浴室棟も利用しての避難所生活の疑似体験を実施する機会を設け、具体的に避難所での生活環境に必要なパーティションや身近な材料で製作できる家具などのデザイン提案につなげていきたいと考えている。

総合生活科学 研 究 部 門

〔活動報告〕

2018 衣食住生活研究センター講演会

「生活者、消費者としての環境に関する課題と改善について」…………… 32

藤木 節子・長浜 小春

2018 衣食住生活研究センター講演会

「生活者、消費者としての環境に関する課題と改善について」

藤木節子、長浜小春

◆目的

本学の学生の様子をみると、教室の冷房温度を下げすぎたり、ペットボトル飲料の消費の多さなどの現状がある。近年の生活を取り巻く数々の課題「私たちの暮らしと環境」について、実態を把握し自分がどう暮らすかを具体的に考えることのできる生活者となるよう指導する必要性を痛感してきた。環境コンサルタントとして活躍の本学の杉山涼子特任教授より、家政学を学ぶ全学生対象に講演をお願いし実現に至った。衣食住生活研究センターとしては、初めての講演会となり学生とともに岐阜県内の家庭科教員への研修機会として案内をした。

◆活動方法

- 1 日 時 平成 30 年 11 月 15 日(木) 13:00～14:30
- 2 場 所 岐阜女子大学 新4号館5階 大ホール
- 3 講演テーマ 「生活者、消費者としての環境に関する課題と改善について」
- 4 講演者 杉山 涼子教授 岐阜女子大学特任教授 岐阜新聞社社主
- 5 対 象

家政学部健康栄養学科(2～4年)
学生、生活科学専攻(1～4年)学生
教職員、県内家庭科教員 7 名参加
*健康栄養学科 1 年生は、杉山教授
の授業履修、住居学専攻は他事業
実施のため今回は不参加。

講演会終了後、学生はレポート提出を
課題とした。



写真1 杉山涼子教授講演の様子

◆活動結果・考察

講演内容:プレゼンコマタイトルは下記のとおりである。

- 1) エコライフとは
- 2) 省エネルギー
- 3) 水
- 4) ごみ
- 5) 食べ物、食品ロス
- 6) 富士市ごみ組成成分分析調査、ごみの中から出てきた食品
- 7) 日本のもったいない事情
- 8) 消費期限と賞味期限
- 9) フード・マイレージ
- 10) 環境家計簿、(岐阜県)、うちエコ診断(家庭エコ診断制度)
- 11) ZEH(ネット・ゼロ・エネルギー・ハウス)、ZEHのイメージ
- 12) エコドライブ10のすすめ
- 13) 持続可能な開発、GOALS、持続可能な開発目標(SDGs)、SDGsへの我が国の対応、SDGsターゲット12.3
- 14) G7エルマウサミット(2015年6月)、G7伊勢志摩サミット(2016年5月)、富山物質循環フレームワーク、G7タオルミーナサミット(2017年5月)、G20ハン

ブルグサミット(2017年7月)、G7シャルルボワサミット(2018年6月)、G7海洋プラスチック憲章
 15) パリ協定、日本の約束草案、1.5℃特別報告書(2018年10月)
 16) 循環経済(Circular Economy)、循環経済におけるビジネスの変化
 17) シェアリング・エコノミー、予測・事例、国内のシェアリング・エコノミー事例
 18) 線形経済から循環経済へ、持続可能な社会に向けた総合的な取組、ごみと地球温暖化の関係、循環型社会の定義(循環型社会形成推進基本法)
 19) 循環型社会のキーワード:3R、REDUCE:ごみを出さない、REUSE:再使用、RECYCLE:リサイクル、リサイクルと環境負荷、循環型社会形成のための法体系、容器包装リサイクル法、「容器」や「包装」がごみに占める割合、識別マーク、我が国における物質フロー、循環型社会の物質フロー指標、資源生産性の定義と達成状況、循環利用率の定義と達成状況、最終処分量の定義と達成状況
 20) 皆さんにお伝えしたいこと、“MOTTAINAI”(もったいない):3R+R



写真2 受講者の様子



写真3 講演会場の様子

ー講演会後の学生レポート6点を以下に紹介する。ー

1) 生活科学専攻2年 大森 裕奈

環境に関する講演を聞き、私たちにとって避けることのできない問題について考えることができた。初めの風刺画を一目見た時から、私たちはついつい思っているだけで、行動にうつせていないことを痛感した。私たちが無駄にしている水や食品の量を実際に数字で見ると、その量の膨大さに驚き、これらを私たちがきちんと節約すれば何人の人が飢餓から救われるのであらうと思うと悲しくなった。また、日本は食品のほとんどを外国からの輸入に頼っているため、フードマイレージによる負荷が大きいと思う。気候の面から完全に地産地消にすることは難しいことだとは思うけれど、できるだけ地産地消を心がけたり、近隣の国からの輸入を増やすことで、フードマイレージを下げることはできるのではないかと思った。

現在の日本は大量生産・大量消費・大量廃棄になっていて、循環型社会とは逆の社会になってしまっていると思う。キーワードの3Rは多くされるようにはなったけれど、まだレジ袋を有料でも買う人が多いことは事実だし、分別がきちんと行われないこともあると感じている。リサイクルをするにしても、その工程でエネルギーを使っているということを聞いたときは改めてリサイクルよりリユース、リユースよりリデュースが大切なのだと思った。また、3Rにさらにオリジナルの「+R」を考えることが大切だと聞き、私は「Remake」を考えました。着なくなった服や使わなくなったものを組み合わせ、新しいものにリメイクし、1つのものを長く使う工夫をしていこうと思った。この「+R」の考えは初めて聞き、とても感動したため、今後、家族や友人にも広めていきたい。この意識を広めるとともに、持続可能な世の中を作っていけるようになればいいと思う。まず今日から、水や食品を大切に使い、ごみを減らすよう、必要のないものは買わないなど、意識していこうと思う。

2) 生活科学専攻2年 吉田 麻純

エコライフとはだれかが、自分だけではないと考えず、自分なりに何かしらの行動を行うことである。日本はカロリーベースで食品自給率が約40%しかない。つまり、残りの60%は輸入に頼りきっている事がわかる。それなのに日本の食品ロス量がとても多い。

エコロジカルフットポイントで日本をはじめ先進国は高く、日本人のエコロジカルフットポイントを全世界のひとに当てはめたら地球が2.4コ必要とあった。これは住む土地だけではなく、私達が食べる食品を作る場所、農作物を育てる場所が含まれている。また、それだけではなく、私達が捨てる食品ロス分の場所も含まれているわけだ。地球は1つしかない。限られた土地で生きていくためには私達1人1人が意識していかなければならない。

日本は「もったいない」という言葉が辞書に載っている。それが全世界に注目され、日本は鼻が高かったはずだ。しかしながら実際はどうだろうか。他の国と比べて食品ロスが2倍、水の使い過ぎが大量に起こっている。表面上ではリサイクル、リユース、リデュースの3Rなどをあげゴミを減らそうとしている。減っていない事はないだろう。しかし減った量よりも増えた量の方が多くなる。自分がやっても人がやってなければ意味がない。そう考え諦めてしまう時がある。確かに1人の力では食品ロスの0.1%も減らせないだろう。しかしながら1人1人が頑張らないと0.1%どころか0.01%も減らない。他の人がではなく、自分がという意識に変えなければならない。

現在私は1人暮らしをしている。牛乳パックやペットボトル、トレーなどはいつもスーパーに持って行って回収してもらっていた。しかし忙しくなって牛乳パックはそのままゴミにしてしまうことが増えた。リサイクルしなければならないと考えているのになかなか実践することができなくなってしまい、今回の話は耳が痛かった。牛乳パックはリサイクルするために切ると「リサイクルありがとう」の文字が入っている。こういう文字を見ると、自分だけではない。頑張らなくてはいと思う。自分も心を入れ替えて頑張りたいと考える。

3)生活科学専攻 4年 俵 しいな

エコライフという言葉を知ると、環境に配慮した生活というイメージが湧くけれど、実際にエコライフの定義を聞き、小さな1歩が踏み出せば、それはもうエコライフであると分り、誰かが大きな1歩を踏み出しているから、私はもうダメだ…と考えるのではなく、今の自分の生活に見合った小さな1歩が踏み出すことで、環境が良くなると思った。これは衣・食・住全てにおいて関連していると思う。冷暖房の温度を1℃変えるだけで、冷房であれば年間780円、暖房であれば1380円の節約もでき、なおかつCO₂排出量も減らすことができ、一石二鳥とはこういうことだ！と感じた。自分自身も歯を磨く時、ひたすら水を出しっぱなしにしており、30秒で6Lの水が流れていると思うと自分が歯を磨く時、3分～5分かかるとして、36L～60L無駄にしているということになるので、その36L～60Lで、料理など別の用途で利用したらより良く生活できると思った。

無駄になるくらいなら、自分の為、環境の為に利用する方が確実にいいと思う。「食品ロス」という言葉は家庭科の中でもよく出る言葉であるけれど、調理実習の時に気を付けてただけで、考えが甘かったので自分の地元である静岡県富士市のごみ組成成分調査の写真を見て驚いた。教育実習で母校の子供たちが残飯を肥料に変えるために昼休みに当番の子が残飯をちぎって入れ、土の湿り具合によって水や油を入れたり、毎日土の温度を測ったり、頑張っている姿を見ていた裏側で、あれだけの食品が捨てられている現実があると思うと本当に悲しい。自分がもし、貧しい国の1人だったら、「食べられるのに！」「まだ食べられるから食べたい！」と思うはずだ。今生きている場が恵まれているからこそ、気づくことができないのだと思う。人間、つい恵まれた場所で生きていると、自分で考えること、作り出すこと、配慮すること、全てを忘れ、なんでも頼ってしまうのがよくない点であると考え、自分に今できる事は何なのか、自分の生活スタイルを大きく変化させることなくできる小さな1歩は何だろうか、今一度考え、環境だけでなく、衣・食・住、消費生活全てにおいて納得できるよう、心がけたいと思った。

4)健康栄養学科 3年 針山 和奏

小学生の時から総合の時間でecoや3Rについて考えたり、自分の普段の生活の中で何ができるかなど話し合って発表するなど環境を意識した自分の生活を振り返る機会が多くあった。小学生の時は調べ学習で生ごみを土に埋めて何日か経つと土に還ることを知り、実際に家の庭で全ての生ごみではないが、行っていた。実際に掘り返したときに埋めたはずの生ごみが出てこなかったのを見て驚いたのを覚えている。今思えば、日本各地にごみ埋め立て地があり、その原理を利用したものだったのかと思う。

大学生になって、特に管理栄養士の大学に来ている分食品ロスの話を聞く機会が多く、外食した時などに食べ残しがあるテーブルを見ると意識してしまう。私はあまり食べ残しはしないが、バイキングに行ったときなど食べきれない分までもってきちゃって残してしまうことがたまにある。バイキングはいろいろな食べ物が自分の欲しい分だけ取ってこられるため、食べ残しされやすい形式だと思う。また、1人暮らしをするようになって自分で料理をするようになると1回の料理につき出てくる生ごみの量を意識するようになり、多いともったいないという感情が生まれるようになった。何か新しいものを買

う前に家にすでにあるもので代用できないかを考えるようにもなった。1 人暮らしで自分で何でもするようになると生活に対する意識が大きく変わることを身をもって経験した。

3R+R という REDUCE、REUSE、RECYCLE の 3R にプラスして自分なりの“R”をつけ加える考えはすてきだなと思う。私も私なりの“R”を決めようと思った。

5)健康栄養学科4年 渭原 はるな

今まで様々な場面で環境問題について知ることや学ぶことがあり、意識した生活を送らなければならぬと分かっていても、実際の行動に移すことができなかった。今回の講演会を通して改めて生活者、消費者として環境問題について様々な角度から考え、国内外の現状や目標などを学ぶことができた。水も使いすぎない事だけではなく、飲み残したものを流さないこと、何かを買う時にも本当に必要なものか、長く使えるかを考えてから買うこと、食材は旬のものを買うことで、栽培のためのエネルギーが少なく栄養価も高いこと、残り物は工夫して食べること等、自分の生活の中で取り入れやすいようで、忘れてしまいがちなことを例として挙げていただき、大変参考になった。また最後にお話しされた「すべての人が当事者であり、傍観者ではないということと「3R+R(リスペクト)」が強く心に残っている。作り手の方へのリスペクトをすることで自然とモノを大切にすることができゴミを減らすことができるのではないかと感じた。「誰かがやってくれる」「自分は良い」「今回だけ」といった行動が積み重なると問題を大きくしてしまう。分別すること、買いすぎないこと、使いきるなどの行動を積み重ねることで問題の改善に繋がれると考えた。意識をすることはすぐに忘れてしまう。意識をなくしても自然と誰もがエコライフを 3R+R の生活ができることが必要とされると感じた。

6)健康栄養学科 4年 波多野 由貴

今日のお話を聴いて、自分にできることから環境を守るためにできる事を何かやってみようと思った。水を出しっぱなしにしないようにするとか、リサイクルできるものはリサイクルするとか、冷暖房の温度設定や付ける時間の調整とか、分かってはいたけれど、実際にはできていないことばかりで、意識することすら自分が忘れていたことに気づいた。今の生活を思い返すと見ている訳でもないテレビが付きっぱなしになっていたり、何かをしている訳でもないのに夜遅い時間まで起きていて電気を付けていたり無駄が多いということに気づいた。自分が意識して行動することが、環境を守ることに少しでも貢献できるのであれば、テレビを消すとか早く寝るように意識するとか、できそうなことからやってみようと思った。私は車で通学していて、車通学を自転車通学に変えることは現実的ではないけれど、エコドライブを意識することで少しは排気ガスを抑えた運転ができるのではないかなと思ったし、エコドライブについて詳しく調べて実践してみようと思った。

日本の食品ロスの量が世界全体の食糧需給量の約 2 倍と知って驚いたし、日本ではそんなにたくさん食品が捨てられていることがショックだった。こういった事実管理栄養士として対応できることもあるのではないかなと思ったし、この事実を知った上で仕事をしていかなければいけないと感じた。

写真 4

岐阜新聞掲載記事

2018 年(平成 30 年)

11 月 16 日 金曜日

エコ行動、まず実践

岐阜女子大杉山特任教授 講演

岐阜女子大衣食住生活研究センターの講演会が15日、岐阜市太郎丸の同大であり、環境・廃棄物コンサルタントで同大特任教授の杉山涼子さんが、家政学部約320人に、よりよい消費者の在り方について語った。

杉山さんは岐阜新聞社主・取締役会長。この日は「生活者、消費者としての環境に関する課題と改善について」と題し、暖房の使用時間を1日1時間減らすなど二酸化炭素の排出量削減などが期待できる身近なエコ行動を紹介。「頭で分かっている

でも行動しなければ世の中は変わらない。自分から実践を」と呼び掛けた。ケニアの環境活動家ワンガリ・マタイサイ



身近なエコ行動を紹介し、「できることから実践を」と呼び掛ける杉山涼子さん。岐阜市太郎丸、岐阜女子大。

んが国連で紹介した「もったいない」という言葉には、リデュース(削減)、リユース(再利用)、リサイクルの3Rに加え、リスペクト(尊敬)の意味が含まれると言いつくりに関わる人への敬意が大切。皆さんは家庭生活の専門家。一人一人がオピニオンリーダーとなってほしい」と期待した。(大賀由貴子)

— 考察 —

環境問題の専門家である杉山涼子先生による説得力のある熱のこもった、充実した講演会で、あっという間の90分であった。

昨今環境問題についての情報は多く、気にはするが、具体的にはなかなか実践できていない日常生活において、私たちは「当事者であり、傍観者ではない」との言葉に、先送りせず今意識し、賢い消費者であり生活者でなければならないと痛感した。

衣食住生活研究センターは未来につながる生活教育を推進し、地域社会に貢献していくことを使命とし、平成28年度開設された。3年目を迎え、初めて家政学部の学生が揃い、県内の中学校・高等学校の先生方に案内して講演会を開催することができた。

衣食住生活を中核に、社会の変化に伴う生活環境や価値観の影響を受けながらも、生活を豊かにすることを目的に、センターとして今後も本講演会のような企画を推進していきたいと考える。

岐阜女子大学 衣食住生活研究センター 研究・活動レポート
第4号

発行年月日	令和元年 11 月 30 日発行
発 行 者	岐阜女子大学 〒501-2592 岐阜市太郎丸 80 番地 TEL058-229-2211
印 刷	ヨツハシ株式会社 〒501-1136 岐阜市黒野南 1 丁目 90 番地 TEL058-293-1010